

Title	二十一世紀への準備：七ヵ年計画
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume9, 1994.10：13-19
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3020
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

二十一世紀への準備——七カ年計画

大木英夫

(1) はじめに機構的なこと

この新年の研修会は、短大が始めたものであります。その時の講演の記録は、「キリスト教と諸学」におさめられています。それが短大と大学の、つまり大宮上尾キャンパスの新年行事となりました。短大と大学の協力関係は、制度的には高等教育協議会という形をとるに至っております。協力の「協」は、力が三つ、十は多いを表すというが、わたしは、あえて十字架を意味するものと読んで見たいと思います。協力とはなかなかできないものであります。しかし、それが制度化することがまた重要なのであります。二つの教授会が協力するのは、特にそれぞれの大学の経験を持っておられる教授たちが集まることでは、決して容易ではありません。協力とは、実際には精神の試練であると思います。オール聖学院ということが、去年のテーマでした。聖学院は、幼稚園から大学までありますが、共に神を仰ぐ教育共同体であります。幼稚園の先生が一番低く、大学の先生が一番偉いなどと思わないのであります。神のもとには、富士山も筑波山もみな同じく平板化されますが、そのように人間はみな兄弟姉妹であり、ただ機能において

異なるだけなのであります。この研修会は、教員だけの集りではない、職員も一緒であります。協力はそういう精神の基礎の上に成り立つのではないでしょう。誇りを失わせるようなことを語っているではありません。誇りの質を変えることなのです。イエス・キリストが弟子の足を洗ったということを感じ起こして言っているのです。ミルトンの『パラダイス・ロスト』に、*Be lowly wise* という言葉があります。Be wisely ignorant という言葉が、彼静先生は反対、金井先生は賛成、「知らぬが仏」ということがあります、わたしは金井先生における *wisely ignorant* だと思っています。

去年のイベントは、オール精神の漲りでありました。誇り高き女子聖学院の或る教師はそれでも反対でした。しかしいつかは、協力の喜びが、孤独にまざることを覚えるようになることを期待しています。神が万物の究極原因であるとすれば、キリスト教信仰におけるその神は三位一体、つまり究極原因そのものが孤独ではなく、その中に交わりをもつのであり、聖学院はそういう神を仰いでいるのであります。

この協力の制度的現象は、いろいろのところに現れています。事務機構、設備、行事などに現れています。ここでは宗教センターについて述べておきたいと思えます。これは、大学紛争におけるキリスト教学校の崩壊を見たあと、新しいキリスト教大学、とりわけプロテスタント大学として出発する際、その意義と位置を明確にすることが大学形成に重要だと考えて設置されました。いろいろな崩壊を見てきました。それは理念の弱さの結果であったのであります。関東学院大学はその最たるケースであると思えます。日本にキリスト教大学をつくるということは、大変な課題であります。国立ではない、私立の形態でキリスト教、特にプロテスタント大学をつくるのは、一種の「文化闘争」(Kulturkampf)であります。特に世俗化された近代日本においては極めて難儀な事業であります。その大きな課題は

勿論大学全体の担うべきものでありますが、そのあたかも氷山の一角、いや、縁の下の力持ちのように、宗教センターが存在しているのです。またそこに、他のいろいろが協力制度の中でとりわけ顕著に短大と大学の協力の現れがあります。

(2) 二十一世紀への準備——七カ年計画

制度的な面でおいろいろ述べなければならぬ聖学院の特色がありますが、時間も限られていますので、これから聖学院全体はどういう方向に向かっていくのかということに触れてみたいと思います。近頃「不透明」という言葉が多く語られています。不況の行方、政治の行方、日本の行方、はたまた世界の行方、みな「不透明」と言われます。聖学院はどうでしょうか。

昨年は九〇一一〇の記念行事がありました。それが終わって、では一九九四年からどうなるのか。確かに「転換」が起こるのでなければならぬと思います。一月二二日、わたしは女子聖学院の小倉・鈴木両先生とここで述べるような話をしました。それは冬至の日でありました。地球には冬至のような転換点があるのです。それは自然の中に自然に（必然性をもって）起こります。しかし、歴史の中では、自然世界のように自然な仕方では転換は起こりません。新しい時代は、単に時間の経過に乗って自然に来るものではないのであります。歴史の中の転換とは企てられなければならないことでもあります。企て、つまり自由をもってする転換であります。

たしかに、自然の転換と歴史の転換とは似たところもあります。冬至の転換は、季節が春になる前に起こります。むしろ季節的にはかえってこれから冬になるのであります。それと同じく、新しい時代は、古い時代の終わる前に、既にその内部で開始するのであります。このことを十三世紀の神学者フィオーレのヨアキムが教えました。一九九四

年は、二十一世紀の開始の七年前、あと七年で二十一世紀という年であります。一九九三年のイベントが成功裏に終わったことを神に感謝しています。しかし、その感謝を、新しい計画によって具体化せねばならないと考えるのであります。一九九四年を、「二十一世紀への準備——七カ年計画」の第一年と規定したいと思えます。二十一世紀になった時、聖学院大学と女子聖学院短大とは、日本の高等教育界にプロテスタント大学としての個性的にして鮮明な姿で立つことを願っています。すでに過去数年の歩みで聖学院は、少なくともキリスト教学校教育界では関心を呼んできました。それを更に進めるのであります。

文部省に政経学部設置の申請をした段階から完成年次までを第一次形成期とするならば、これからは文部省の監督から自由になっていよいよ第二次形成期に入ることです。七カ年計画の基本理念は、聖学院高等教育のレベルにおいて言うならば、新しい「プロテスタント時代」のための新しい「プロテスタント大学」の形成ということであり、ティリッヒは「プロテスタント時代の終焉」ということを言いました。しかし、世界史の諸徴候は、プロテスタンティズムが生み出した文化価値の普遍化を表しているのではないのでしょうか。最近の趨勢がティリッヒの説を論駁しているのであります。日本に関して言えば、たとえば日本国憲法、また教育基本法にそれが見いだされるのであります。それに対応してプロテスタント大学の形成を言うのであります。

このことを主観的な見方と思われなために、新年の一月三日の朝日の社説を参照して見たいと思えます。それは「世紀末の世界と私たちの未来」というものであります。この論説には「チェーホフへの共感」、「煮えたぎるマグマ」、「価値観ぶつかる時代」、「国民国家のたそがれ」という小見出しがある。まず「チェーホフへの共感」は、前世紀末のロシアの地方都市の美しく知的な三人姉妹に触れて、彼女らがモスクワへと脱出を夢見る姿への共感が今世紀末にもあるというのであります。第二は、「一国の枠内では解決できぬ難問が多発し、主権をもつ国民国家からなる世

界のあり方に変革を迫っている」状況を指摘しています。第三は、「さまざまな価値観のぶつかる、多難な時代」にあつて「私たちにいまもとめられているのは、民主主義の理念を新しい状況に合うよう、みがき直すことではないか」と呼びかけ、そして「西欧に生まれ育つた自由、人権、民主の思想は、風雪に耐えてきた。その核心をなす寛容と忍耐、そして法治の精神は、人類すべてが分かちもつべきものである」と宣言するのであります。最後の第四は、「民主主義の地球化」をめざし、「狭い国益観」の妥当性を疑い、そして「何世紀の間、自明のこととされてきた、国民国家優先の考え方そのもの」が世紀末の終焉に至るであろうという予感をもつて終わっているのであります。ここに言われている「西欧に生まれ育つた自由、人権、民主の思想」は、まさにプロテスタント文化価値と呼ぶべきものであります。もしこの社説が言う「民主主義の地球化」が世紀末の世界の課題にとどまらず、むしろ新しい二十一世紀の課題でもあるならば、今日の不透明さを越えて見るべきものは、新しいプロテスタント文化の時代の展望なのであります。今日の不透明さの霧を吹き払うのは、この新聞が予見している世紀末から二十一世紀への歴史形成の課題に対する教育的献身であると思います。この洞察と献身が、日本におけるプロテスタント大学の形成の歴史的意義を認識せしめるはずであります。

聖学院の高等教育および研究機関は、その担い手たるべく、みずからの存在と使命を明確に自覚する必要があると思います。この大学・短大は、そのプロテスタント文化の継承と発展をもつて日本の将来における存在理由を確保せねばならないのであります。明治の帝国憲法の文化的担い手は帝国大学でありました。しかし今日日本国憲法や教育基本法の担い手として自覚的に建てられた大学が、——本来なら私学、とくにキリスト教私学がそれであるべきですが——聖学院を除いて他にあるでしょうか。プロテスタントイズムという文化基盤を共有することは、聖学院に、たしかに或る限定された（というのは、たとえばカトリシズムや東方オルソドクス・キリスト教との対比において）基盤では

ありますが、それでもなお世界史的コンテクストにしつかりスタンスをとる大学として、日本を文化的異質性に閉鎖せしめるのではない、世界的文化交流を可能にする普遍同質性を付与せしめることになるのでありたいと願うのであります。端的に言えば、これまでの和魂洋才的な文化輸入ではなく、新和魂洋才の教育と研究をもって、自主的にして普遍的な文化創造を試み、それをもって二十一世紀の新しい日本の形成に貢献することができるようになるのであります。

七カ年計画の最初からめざすべき具体的目標として以下のことを箇条書的に指摘しておきたいと思ひます。

- (1) 聖学院の特色を最大限に發揮することによって、教育力を高める。
 - ① キリスト教教育の課題——それは教育基本法の理想と呼応して国民的課題となる。
 - ② オール聖学院の全体的視点——教育の豊かな可能性を追求する一貫教育。
- (2) キリスト教的私学の本筋に立って、助成金依存体質から脱却する。
 - ① 日本農業のような脆弱体質から脱却し私学本来の特色を生かして行く。
 - ① そのため二つの高校との関係を重んじる。

聖学院教育会議の開催に向けて準備。
 - ② 先ず埼玉県への定着が重要である。

政令指定都市構想と聖学院大学・短大の位置づけ。そのための委員会を設置。
 - ③ 財政についての検討審議を始める。

助成金依存体質からの脱却と、ASF推進。財政については三菱銀行取締役小林監事、三和銀行頭取の渡辺氏や、その他のアドヴァイザーの参加を求める。

(3) 教育改革による教育力の増進——一貫教育の利点を確立し強調する。

① 数学教育研究プロジェクトを継続推進する。

② 英語教育研究プロジェクトを継続推進する。

③ 国際交流室の設置による国際交流を組織的推進する。

これは高校レベルの国際交流をも取り扱い、全法的視野で活動する。国際交流は、聖学院の特色となる。プロテスタント諸国（ドイツ、スイス、オランダ、グレート・ブリテン、アメリカ）の大学との関係を作りだす。オックスフォードのマンسفールド・コレジは典型的プロテスタント大学である。